
IS インフィニット・ストラトス —鋼を纏う者—

砂惨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス ―鋼を纏う者―

【Nコード】

N3129BA

【作者名】

砂惨

【あらすじ】

IS――正式名称 インフィニット・ストラトス。それは宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。今現在において軍事情勢に大きく関わるその存在の欠点は、『女性にしか扱えない』事。しかし、その欠点を覆した者が現れた。元日本代表織斑千冬の弟、織斑一夏である。そして、その出来事と示し合わせたように、一人の男性教師がIS学園に赴任する――。

オリ主、非ハーレムの物語です。原作、キャラには少しずつ亀裂が入っていった、最後は崩壊するでしょう。

プロローグ（前書き）

はじめまして、砂惨です。執筆に関しては素人ですが、よろしくお
願いします。

プロローグ

「……ふむ、メンタルカウンセラー兼、IS武装工学の教師としてですか」

ここはIS学園の学園長室。学園長である轡十蔵は、にこにここと人の良い笑みをしながら、向かいに座る者に問い掛けた。

「……ああ。そうするよう、言われている」

そう答えた男性の表情は、学園長とは逆の無表情・無感情で、淡々と答えた。

「言われている、ですか。まあ、今年はこの学園初の男子が入学しますし、受理しましょう」

「……………」

「……………」

「……そうか」

この男、本当にメンタルカウンセリングなど出来るのだろうか。十蔵は疑問を感じながらも、それを笑顔で隠し、話を続ける。

「しかし、随分と手の込んだ履歴書ですね。誰に作ってもらったのか……は言ってくれそうに無いですね」

「……………」

「では、あなたは来年度から我が学園の教師です。しっかりと職務を果たして下さい」

「……恩に着る」

「いえいえ」

男は十蔵に一礼すると席を立ち、杖をつきながらゆっくりと歩いて部屋を出て行った。

「……と、信用してはみましたが、あの履歴書を作ったのはあなたの家ですか？楯無君」

閉まった扉を眺めながら、十蔵は呟くように、部屋の隅で気配を殺していた少女に話し掛けた。

「いえ、私は学園長と会うよう手を回しただけです。彼は私と会った時もうあれを持っていましたよ」

答えるのは水色の髪を持つIS学園の生徒会長、更識楯無。その見た目とは裏腹に、対暗部用暗部『更識家』の17代目当主で、裏の世界に深く通じている。

「私も全て信用してはいません。しかし、彼が『職務を果たす』事に応じたなら、それは嘘ではないでしょう。その位は信用出来る人物ですよ」

「だがね、楯無君。その程度では……」

「それに、今は戦力が必要です。彼程護衛や伏兵に向いた人はそう

いませんよ。敵か味方が分からないからといって放っておくには惜しい人物です。それに……」

それに、裏切るようなら私自ら消します。その事を楯無の雰囲気を感じた十蔵は、そうですか、と頷くと、新たな疑問を投げ掛ける。

「では君でないとすると、彼に依頼したのは誰なのでしょう？あの履歴書といい、随分と用意周到ですが」

「さあ？彼の受けた依頼は『学園に入る事』だったそうですよ？護衛に関する事は更識家からの依頼ですし……あ、そういえば」

「何です？」

十蔵が尋ねると、楯無は年相応の少女らしい笑みを浮かべ、楽しげな口調で答えた。

「そういえば、『学園に知人がいる』と言っていましたね。案外、自分の意志で来たのかもしれませんが？」

これは、『世界で唯一ISを動かせる男子』織斑一夏がIS学園に入学する、二週間前の話。

プロローグ（後書き）

今回はプロローグですね。次は簡単なキャラ設定をしようかと思ひます。

主人公プロフィール（前書き）

話が進む程加筆していきます。ネタバレが怖いなら見なくても大丈夫です。

主人公プロフィール

来栖 纏くるす まとい
(33)

今作の主人公。メンタルカウンセラー兼IS武装工学の教師としてIS学園に赴任して来た男性教師。その際10歳さばを読んで23歳としている。

アメリカ人と日本人のハーフであるが、身長以外の風貌はほぼ日本人。名字の来栖はアメリカ人の父の名字(Crus)を漢字にあてたもの。

体つきはがっしりしていて、身長187cm。髪は黒く、長い後ろ髪をゴムで縛ってまとめている。顔は純日本風で彫りが浅く、若作り。左眉から左頬に大きな傷がある。目は右が黒、左が金のオッドアイ。

総じて『男前』と評する事の出来る風貌だが、無表情・無感情であり、コミュニケーション能力が壊滅的。脳に障害があるらしく、常に杖をつきながらゆっくり歩いている。

千冬と面識があり、第1回モンド・グロツソの時千冬の専属整備士であった。十年前は神父であつたらしい。

主人公プロフィール（後書き）

次から原作に介入していきます。完全な見切り発車ですが、ラウラが登場するのを夢見て頑張ります。

第一話 再会（前書き）

さて、見切り発車で始まり始まり。

第一話 再会

「学園長が？」

「はい。SHR前に来て欲しいそうです。伝えたい事があると」

IS学園授業初日。職員室でお茶を啜っていた1年1組担任の織斑千冬は、自身の副担任である山田真耶に、怪訝な視線を向ける。

「解せないな。私は呼ばれるような事をした覚えはないが」

「さ、さあ……春休みに補習でグラウンド10周なんて鬼のような課題を出したから、とか……」

山田の思わず零した本音の台詞に、教師の間ですら『鬼軍曹』と呼ばれる千冬の視線が、怪訝なものから文字通り殺意を込めたものとなる。

「ほう、山田先生はそんな風に思っていたのか。どうだ、生徒に示しをつける意味でグラウンド30周でも」

「い、いえいえっ！あ、私先に自己紹介を始めておきますからっ！」

「……ふん。わざわざ神経を逆撫でする事もなかるっに……」

走り去っていく山田を睨みながら、千冬は溜め息一つをして立ち上がる。お咎め無しとは珍しい、鬼の目にも涙だろうか。事の成

り行きを見ていた職員の一入榊原菜月は、学園長室に向かう千冬の背中を見ながら、かなり失礼な事を考えていた。

……山田先生は廊下を走っていたな。校則違反としてグラウンド5周を課そう。

『鬼軍曹』どころか鬼そのものの千冬の思考回路であった。

□ □ □

「失礼します。1年1組担任の織斑千冬です。学園長、何用でしょう……」

「ああ、来てくれましたか、織斑先生。さあさ、そんな所で止まってるだけで、どうぞ入って下さい」

「……………」

十蔵の言葉に反応すらせずフリーズする千冬。その顔はいつもの凜々しいものとかけ離れ、口をあんぐりと開けた呆け顔である。

これはまた、珍しいものを見ましたね。あの織斑さんがこうなるとは……。

十蔵は苦笑しながら、隣りに立つ、杖をついた直立不動の男の紹介を始める。

「メンタルカウンセラー兼、IS武装工学の教師として赴任した来栖纏先生です。あなたの所の副担任としますから、面倒をみてあげてください」

「……よろしく頼む」

「……………」

「……………」

ただひたすらに続く沈黙の時間。いい加減話を進めなければと十蔵が口を開こうとすると、千冬は顔を俯け、肩をわなわなと震わせ始めた。

「あ、あなたは……」

「織斑先生？」

がばつと顔をあげる千冬。その双眸には『鬼軍曹』と呼ばれる怒り顔には、大粒の涙が浮かんでいた。これには十蔵の笑顔が驚愕に、纏の無表情にすらその眉間に薄く皺がよる。

「あなたはっ、今の今まで一体どこをほつつき歩いていたんですか！」

「……………」

「いくら探しても、いくら連絡を取ろうとしても、まるで見つからない！自分の身体がどんな状態なのか、あなたは自覚していないんですか！？」

「……俺はドイツに居ると」

「二年前まででしょう！整備士を止めてドイツ軍に行くと行って私のもとを去って、私がドイツ軍に行けば行方をくらまして！！」

「……俺がいれば君は氣を使つたろう」

「いない方が氣を使います！！」

「……………」

ずかずかと歩きながら近付く千冬に、言うこと全てが封殺される纏。そしてその千冬の剣幕に、一步後ずさる十蔵。

千冬は纏のすぐ目の前にまで行くと、ついに溜まりに溜まった涙をぼろぼろと零しながら、纏のスーツの二の腕部分を、シワができる程ぎゅつと握った。

「私が、どれだけ心配、したことが……………」

「……………」

泣き顔を彼に見せたくない、その思いで千冬は再び顔を俯け、額を彼の左肩に乗せる。纏は右手に持っていた杖を傍らに置き、震える千冬の頭をそつと撫でた。

「……すまない。心配を、かけたな」

「……はい。心配、しました。でも、あなたが無事でよかった……」

俯き続ける千冬の頭を撫で続ける纏。その二人の姿を見て、正に鬼の目にも涙、ですね……と、笑顔の十蔵はそう小声でそう呟いた。

千冬の涙は、怒りのものから、嬉しさのものへと変わっていた。

□ □ □

その後、泣き止んだ千冬は十蔵の、まるで孫を見るような優しい視線に気付くと、いつもの厳しい顔に戻り（必至に取り繕っているのは十蔵にバレバレだった）、一礼して纏の歩調に合わせるようにゆっくりと学園長室を出た。

扉を閉め、千冬は杖を支えに立っている纏の方を向く。そして深呼吸を一つすると、ふわりとした優しい笑みを彼に向ける。

「先程はすいませんでした。……お帰りなさい、纏さん」

「……ああ、ありがとう」

「……立ち話をしているのは、SHRが終わってしまいますね。歩きながら、話をしましょう」

纏は一つ頷くと、ゆっくりと杖をつきながら歩き出す。その歩調に嫌な顔をせず、微笑みながら隣りを歩く千冬の姿は、甲斐甲斐しい妻のようにも見えた。しかし、十蔵から受け取った履歴書に目を通すと、笑顔は呆れ顔に変わった。

「この履歴書、作ったのは束ですね？所々ふざけて書いたな、あいづは……。なんですか、年齢が23歳って。10歳さば読んでいるじゃないですか」

「……束は、その方が逆にバレないと言っていたが」

「ええ、見た目だけはとても30代には見えませんよ。しかし、職業をメンタルカウンセラーにするなんて……。はつきり言って纏さんより犬の方がコミュニケーション能力がありますよ」

「……………」

「……………」

「……そうか」

確かに犬の方が何らかの反応をする。千冬はこの反応の鈍さについては何とも思っていないが、メンタルカウンセラーとしては逆に神経を逆撫でする可能性が高い。

「まあ、あなたは元神父ですし、私や束もあなたの世話になりました。大丈夫ですよ」

「……………」

「……………」

「……そうか」

大丈夫なのだろうか。

第一話 再会（後書き）

さっそくキャラ崩壊を起こす千冬さん。変にデレデレさせないよう頑張ります。

オリ主の容姿については次話、もしくは一つ前のプロフィールを参照して下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3129ba/>

IS インフィニット・ストラトス —鋼を纏う者—

2012年1月9日20時50分発行